地域・人・自然が共生する
里山の災害に強い学校

鳴瀬桜華小学校（宮城県東松島市）

本事例のキーワード

防災　ICT活用　柔軟な学習空間　小学校

事例のポイント

東日本大震災で津波被害を受けた学校が高台移転をした事業。子どもたちの教育環境の整備にあわせて、地域の防災拠点としての機能の確保にも取り組んでいる。

事例概要

鳴瀬桜華小学校は、東日本大震災で津波被害を受けた旧浜市小学校と、旧小野小学校を統合して平成25年に新設された小学校である。海岸から約１キロの場所にあった旧浜市小学校には、震災時、高さ５メートルの津波が押し寄せた。

当初、鳴瀬桜華小学校は旧小野小学校の施設を活用して教育活動を始めたが、旧小野小学校の施設については老朽化の進捗が著しかったこと、また、統合による児童数の増加により狭隘化も課題となっていたことから、高台へ移転して新校舎を整備することとなった。

新校舎は、山を切り崩してつくった海抜９.５メートルの高台にあり、校舎と講堂、プールが一体となった建物で、災害時には地域の避難所や防災拠点になる。食料の備蓄庫や発電装置をそなえ、プールの水は災害時用の水として活用できるように計画されている。また、無線LAN、電子黒板、タブレット端末が全ての教室で活用できるようICT環境も整備されている。

移転場所を決める話し合いや造成工事に時間を要したため、東日本大震災の発生から新校舎への移転まで約10年がかかったが、たくさんの地域の思いが込められた新校舎は、地域の新たな拠点となることが期待されている。

CO-SHA PLATFORM
CO-SHA Platform ウェブサイト
https://www.mext.go.jp/co-sha/

事例ポイント１

災害に強い学校

鳴瀬桜華小学校の新校舎は、東日本大震災でも津波が到達しなかった高台にあり、災害発生時には地域の避難所となる。災害時の避難所としての機能を確保するため、体育館はハイサイドライトによる自然採光で明るい大空間を実現するとともに屋根には太陽光発電パネルを設置し、発災時の電源にできるよう蓄電池などの設備も備えたほか、備蓄倉庫の設置、物資搬入用の車両ルートの確保、雨水・プール水のトイレ等への利用、受水槽による飲料水の確保、プロパンガスの利用など、災害時を想定した計画とされている。

予め災害に対する安全性を確保することはもとより、良好な避難生活を送ることができる学校施設を整備していくことも極めて重要である。

自然採光により明るい体育館

体育館の屋根に設置された太陽光発電パネル
（発災時には電源として活用できる）

備蓄倉庫

プール水の給水口
（断水時にはトイレの排水に活用できる）

事例ポイント２

新しい時代の学びへの対応

個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実するためには、学校教育の基盤的なツールとして、ICTは必要不可欠なものである。鳴瀬桜華小学校では、普通教室には、電子黒板、無線LANを整備し、タブレット学習などに対応できるように電源や配線スペース、端末数分の充電保管庫も確保している。各学年の発達段階に応じて、ICTを活用した調べる、まとめる、発表するなどの学習活動を効果的・効率的に実施している。

また、普通教室・特別教室に子どもたちが集中して学習できる機能的な空間を確保しつつ、廊下や多目的スペースの周辺には、展示棚やスクリーン、掲示板、ベンチ、ホワイトボード、少人数学習スペース等を設けており、多様な学びのスタイルへも対応できるように計画している。

プロジェクターを活用した授業の様子

タブレットで調べたり、まとめたりする子どもた

普通教室には端末の充電保管庫

十分な広さの多目的スペース

多目的スペースを使った授業の様子

ベンチにならんでの学習

学校概要

鳴瀬桜華小学校
宮城県東松島市

全体工期：令和元年７月～令和３年３月
学校規模：14学級、259人
敷地面積：16,022m2
保有面積：5,719m2
構造： RC造（一部S造）3階建
※令和５年12月時点